

“表現芸術学科”とは

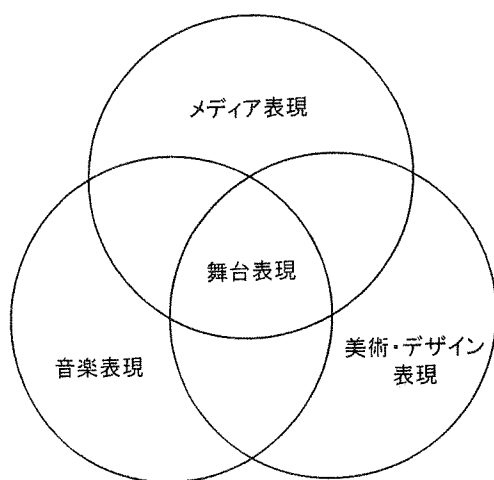
—— 京都賞に見る“表現芸術”の位置づけ ——

岡 本 久

キー・ワード：芸術、教育、表現

私は表現芸術学科の設立と同時にこの学科に就任した。その意味でも特に私にとって表現芸術学科は私自身の新たな門出となったかけがえのない学科であると考えている。

さてところで、この“表現芸術”という学科の名称、実は私はこの名称を最初の頃あまり好きになれずなかなか馴染めなかった。表現芸術という言葉が一体どういった“芸術”を指しているのかがさっぱりわからず、第一“表現芸術”なんて言葉は日本語的にすごくおかしいとさえ思われた。しかし今、私はこの“表現芸術”学科という名称をととても気に入っている。おそらくそれは“表現芸術”という学科がどういうものであるかということを明確に理解し、また他にどこにもない独自のカラーを持っているということができるようになったからかもしれない。



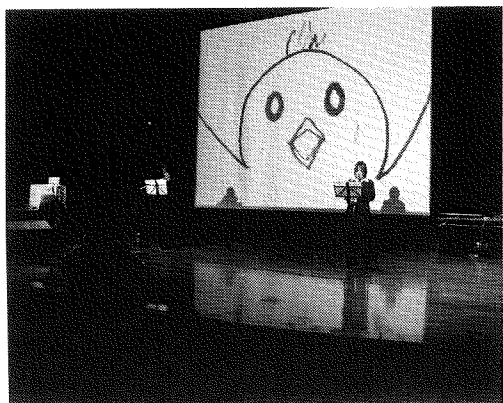
しかしこの名称を本当に好きになったのは、ごく最近のことである。それは表現芸術学科が設立3年を経てようやく“表現芸術”とは何か、というビジョンを出すことができるようになってきたというのが最も大きな理由のひとつであるからだと考えている。あとは、この名称によってようやく“慣れた”だけなのかもしれない。下図はこの学科のコンセプトを簡潔に表したものである。メディア系、音楽系、美術・デザイン系、そして舞台系の各分野がそれぞれ(授業として)独立して存在はしているが、常に相互に関連し合い、そして最終的にはこれまでにない新しい“舞台表現芸術”を生み出していくということを示している。

ここでいう舞台というのは、演劇やステージというような狭義の意味ではなく、あらゆる場所でその場に最適なアートを演ずることができる、というような幅広い意味を持つ。音楽や美術なども同様、クラシック音楽とか絵画だけに留まらず、幅広い意味での解釈とカリキュラムの編成がなされている。またメディア系のほうはコンピュータによる音楽制作やCGアニメーション、映像やそれらの複合作品の制作など、短期大学ではなかなか実現できない広い範囲をカバーしている。

さて、こうした特徴を前面に出している表現芸術学科であるが、具体的に目に見える形では一体どういったことをやっているのかということになる。実際この方針を打ち立ててからのこの一年は、ただただがむしゃらに様々なイベントをとにかくこなしていくという毎日であった。とりわけタイミングよく、神戸市水道局や神戸三ノ宮近くの磯上公園地域の再開発に手がけている民間企業の方々と知り合う機会を得、互いの目的意識の一致する方向でイベントの共催を多数行うことができた。この役1年間を振り返ってみると、次ページに示す写真にあるように様々なイベントを行ってきた。

こうしたイベントを行っていく中で何よりも大切にしたのは学生の自主的参加意欲への啓発であり、出演者からスタッフに至るまであくまでも学生を前面に押し出した形で、全員が協力し合いながらイベントを成功に導かせることであった。加えて単に在校生だけではなくやる気のある卒業生も交え、横のつながりと、そして縦のつながりが深まっていくよう努めてきた。神戸市や磯上公園地域との連携、そして学生の縦横の連携、というように“連携”という言葉がキーワードとなり、その上で地域の活性化と貢献という具体的な結果を出すための努力を行ってきたつもりである。

ただ本当に今はただがむしゃらに取り組んでいるだけで、それを振り替える暇もなく、また次の段階にどのように発展させていくかということをしつくり考えていく時間もなかなか取れないのが実情ではあるが、それでも試行錯誤を繰り返していく中でまだ明確にはないが何か



インターカレッジ・コンピュータ音楽コンサート
2003年12月/静岡文化芸術大学



阪神・淡路大震災9周年記念行事取材
2004年1月/東遊園地



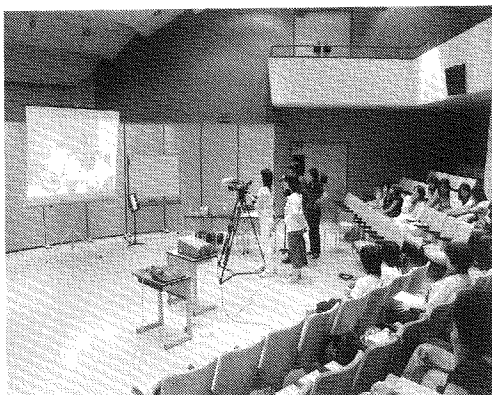
表現芸術学科卒展2004
2004年2月/神戸アートビレッジセンター



はるかぜコンサート
2004年4月/神戸市水の科学博物館



ジャズ・ライブ
2004年7月/バッテリーカフェ(神戸)



映像特別講義
2004年7月/神戸山手短期大学音楽棟演奏ホール

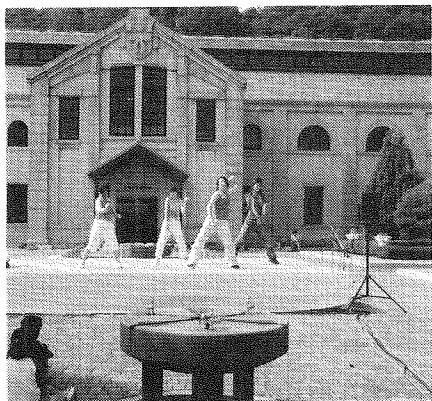
“表現芸術学科”とは—— 京都賞に見る“表現芸術”の位置づけ ——



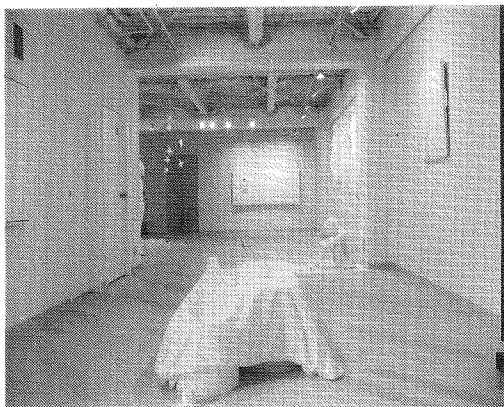
課外講座 夏のコンサート
2004年7月/神戸山手短期大学音楽棟演奏ホール



卒業生のコンサート
2004年7月/神戸山手短期大学音楽棟演奏ホール



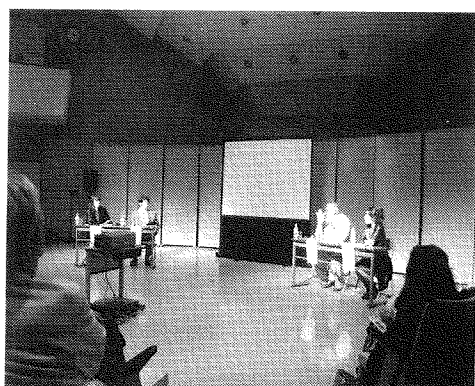
サマーライブ2004
2004年7月/神戸市水の科学博物館



3人展
2004年8月/IPSX MAGNET (神戸)



神戸山手学園創立80周年記念イベント
2004年10月/神戸ポートピアホテル



異文化共存フォーラム
2004年10月/神戸山手短期大学音楽棟演奏ホール

こうして取り組んでいっていき先に明るいものを感じられるようになってきた。そういう風に思えただけでもこの一年の取り組み、そしてこの取り組みに至るまでの学科設立からの3年間、短いものではなかったが、決して無駄なものではなかったと考えている。

もとより“表現芸術”などという言葉は、一般に存在しなかったもので、それがどういうものであるかは私に理解できなかったのは当然であったかもしれない。何なのか判らなかつたから、どうすればそうなるのかも到底判らなかつた。ただ唯一、私の知る限りではあるが、稲盛財団の行っている「京都賞」にかつて「精神科学・表現芸術部門」というのがあり、ジョン・ケージやクセナキス、メシアンなどの現代作曲家をはじめ様々な分野の国際的なアーティストがその賞を受けている中にこの“表現芸術”という言葉があるのは知っていた。いろいろ調べてみたが、他でそうした言葉が使われたことはなかつたようである。しかし今ではこの「精神科学・表現芸術部門」は2000年度より「思想・芸術部門」という名称に変更されてしまっているのので、“表現芸術”という言葉は唯一本学で使っているだけということになる。偶然とは思うが、京都賞において名称変更で“表現芸術”という言葉が消えるのと、“表現芸術”という学科の設立時期がほぼ同じであったことは少し興味深い。

さてこの京都賞における芸術関係の賞についてであるが、第1回のものから今年度にいたるまでのものを表にまとめてみた。表現芸術という言葉は1999年度をもって消滅している。

京都賞 精神科学・表現芸術部門

第1回	1985年	音楽
第2回	1986年	美術-造形芸術(絵画・彫刻・建築)
第3回	1987年	映画・演劇
第4回	1988年	哲学、古代インドおよびギリシア思想史
第5回	1989年	音楽
第6回	1990年	美術-造形芸術(絵画・彫刻・建築)
第7回	1991年	映画・演劇
第8回	1992年	哲学(20世紀の思想)
第9回	1993年	音楽
第10回	1994年	映画・演劇
第11回	1995年	美術(絵画、彫刻)
第12回	1996年	哲学・思想
第13回	1997年	音楽
第14回	1998年	美術(絵画・彫刻・工芸・建築)
第15回	1999年	映画・演劇

京都賞 思想・芸術部門(精神科学・表現芸術部門の名称変更)

第16回	2000年	哲学・思想
第17回	2001年	音楽
第18回	2002年	美術(絵画・彫刻・工芸・建築)
第19回	2003年	映画・演劇
第20回	2004年	哲学・思想

不思議なことに全体を通してみると、毎年賞が与えられているそれぞれの“ジャンル”は、現在の表現芸術学科が打ち出しているそれとかなり一致している。むしろ哲学などの領域に至るまで学科として網羅しているわけではないが、京都賞ではそうした領域をも含めようとすることから「精神科学・表現芸術部門」から「思想・芸術部門」への名称変更が行われたと考えられる。

基本的な点で見ると、この京都賞と表現芸術学科を比較してみると、

精神科学・表現芸術部門	表現芸術学科
音楽	音楽表現
美術	美術・デザイン表現
演劇	舞台表現
映画	メディア表現

という構図が見て取れる。

偶然の一致という言い方は大げさかもしれないが、ある意味で“表現芸術”という言葉は、ひとつの意味を持っていると見ていいのではないかと考えられる。京都賞の他にはなく、あくまでも一例を取り上げてではあるが「表現芸術」という言葉の持つ意味が、音楽・美術・舞台・メディアという幅広い芸術領域の“統合”として位置づけることが妥当であるということが言えるのではないと思われる。

数年間暗中模索で進めてきた表現芸術学科の特色作りは、単にこじつけやオリジナリティーだけを求めてきたものではなく、この言葉がすでに1985年には存在し以来明確なカラーを持っていたということ、そして表現芸術学科がようやくここへ来てその言葉の持つ本質的な姿に自然に近づいていったとも考えることができ、その意味でもこれまで行ってきた、そしてこれから行っていこうという学科の方向性は間違っていないように思える。

今後表現芸術学科では基本構想のもと、より発展的な展開を図っていく。特に地域社会における活動の強化は大きなひとつのテーマであるが、単にそうした際の芸術的活動に留まらず、社会問題や国際社会の動向にも目を向け、何が本当にしなければならないのかということを常に考えていきたい。その意味では「哲学・思想」といったことを含めた「京都賞」にあくまでも現時点では追従する形になるが、また正直のところその「レベルの差」はあまりにも明確ではあるが、先にあるものがはっきりとしているものであり、またそれがはるか向こうに聳え立っているものだけに、目標そのものは明確におくことができ、その上でいくら挑戦しても挑戦し尽くしてしまうということがないだけに、この先指標を見失うことだけはないといえる。

また短期大学の“表現芸術”学科は、短期大学として学生の教育という役割を担うことが本来の目的であり、もとより京都賞とはその達成するものは違って当たり前である。実はこうして比較していること自信がまったくおかしなことと見受けられても仕方がないとも思えるが、しかしこうした方向で大きなビジョンを持つことは間違であるとは思えないし、明確なビジョンを持たない形で“表現芸術”を謳っているならば、それこそ名ばかりの学科であり、京都賞そのものに対する“冒瀆”であるといっても過言ではない。

全国的に各大学・短期大学で名称変更や改組転換が頻繁に行われ、これまでにない新鮮な印象を与えようという狙いで様々な独自性の濃い名称の学部や学科が毎年のように現れているが、いったいその学部や学科の“本質”は何であるのか、そして本当にそこで何を学ぶことができ、そしてどのような将来につなげていくことができるのか、ということを確認していかなければ、いずれこうした改組転換の“流行”が去った後には派手に広げた大風呂敷だけが残るだけであり、体裁をとりつくろうことだけに日夜取り組まざるを得なくなってしまうであろう。

オリジナリティーを出そうとするものが、1年やそこらで他にない独自色を出すことなど到底ありえないことは明らかであり、思えば我々はいつも学生に“学問”はそうしたものだなどと口すっぱく言って聞かせてきたはずである。ひとたび方向を定め進んでいくことを決めたならば、一途に取り組んでいかなければならないことは確かであり、その意味でも表現芸術学科はまだまだこの先やらねばならないことがたくさんある。しかしひとついえることは、もはや当面新たなビジョンを打ち立てることはしなくてもいいということ、それはつまり今すでに目指すべきものが明確であり、できるだけその達成を早急に実現していくことに取り組んでいくことがさらに表現芸術学科を“表現芸術”を学べる学科にしていくことに他ならないからである。

